仙台教区報

発行所カトリック仙台司教区事務所
980 仙台市本町一丁目2番12号
電話○二二二－22－七三七一番
編集・発行人　首藤正義

明日の教会をめざして
仙台司教区50周年記念教区大会

去る9月14・15日、教区創立50周年を記念して教区大会が仙台白百合学園を会場に開かれ、千五百人が集まった。

大会には、教皇大使ウイリアム・アクイン・カルー大司教をはじめ、初代仙台教区長マリー・ヨゼフ・ルミュー大司教、ペトロ小林有方司教も参加され、大会をより意義あるものとした。

大会は、「明日の教会をめざして」のメインテーマの下、講演・パネルディスカッション・対話・ミサの四部構成であった。

イエスの弟子として生きるとは？

講演の中でA・コレーン師（大阪・堺教会）は、「聖書から汲む家庭のあり方」について話された。

同師は、「信仰の目」でふり返って見直した自分の家庭の中での体験をふまえ、イエスの心を探るということで聖書にふれられた。家庭は目的ではなく出発点である。イエスは自分の家庭にとどまらず、まわりの人にいつも心を開き、神の国の実現を目指した。聖書には家庭のあるべき姿のパターンはない。むしろ、どんな心をもって弟子を呼び、その弟子は信仰共同体という全世界をつつむ大きな信仰の家庭を形成していったかが大切。決して二千年前のパターンをまねるのではない。むしろ、今、家庭の中で、イエスの弟子として生きるとは何か、を自分に問うことこそが大事である。イエスの弟子となることはイエスの道を知り、イエスの価値観を自分も歩むことではないか。そのためには信仰養成が必要となる。まず、イエスを知り、愛することによって喜びを味わい、その喜びの証人となる。

イエスの弟子としてイエスの心を持つとは、①イエスにとって最高の価値は何かを自ら問う。②人間はどんな律法よりも大切なもの。③善意だけでも足りないし、迷惑をかけないだけでも足りない。愛の実践のあるところに神がいる。

パネルディスカッション

パネルディスカッションは、「家庭の現状とそのあるべき姿」をテーマに、各県の信徒代表と修道者・司祭のそれぞれの代表者が総勢8人で話しあいがなされた。代表者はそれぞれの現場、幼児教育者、学校教育者、家庭の主婦、地域のボランティア活動者等の立場から生の体験を分かちあった。

佐藤司教からの呼びかけ

対話は佐藤千敬司教が、（次ページへ続く）

司教様の日程
（9月8日現在）

9月
- 8日　中央協・財務委員会（東京）
- 9日　常任司教委員会（東京）
- 10日　カリタス・ジャパン（東京）
- 14～15日　教区大会
- 18日　カリタス・ジャパン（東京）
- 19～21日　FABC（東京）
- 22日　学校法人理事会（仙台）
- 23日　司牧評議会
- 24日　難民関係定例会（東京）
- 25日　カリタス・ジャパン（東京）
- 26日　スペルマン病院理事会（仙台）
- 27日　社会福祉法人理事会（仙台）
- 28日　仙台地区若手修道女の集い（仙台）

10月
- 5日　グローロ師金祝（平）
- 8日　難民定住委員会（東京）
- 9日　常任司教委員会（東京）
- 10日　オタワ愛徳修道会誓願式（仙台）
- 13～14日　宮宗法連本山研修（愛知県）
- 16～19日　カリタス・ジャパン（東京）
- 20～22日　社会司教委員会勉強会（東京）
- 25～26日　NICE準備会（仙台）
- 27～28日　教区司祭団月例会（仙台）

（前ページから続く）

「明日の教会をめざして」と題して30分程の話しをされ、その中で次の3点を問題提起し、フロアーからの声を聞くというものであった。①司牧目標実現への努力②全国大会（福音宣教推進全国会議ＮＩＣＥ）へ向けて③カテドラル問題に関して。

青年部会

尚、今大会には小学生・中学生・高校生・青年の部会も設けられた。

特筆すべきは青年部会である。130人程の青年が集まった。大会スケジュールの中に3時間30分の青年だけの時間を作り、導入のための短い講話（村首ステファノ師）と分科会・全体会を持った。

青年にとっての今大会の成果は、まず青年同士、知り合いになり得たこと、そして、各県の連絡員が決まり、青年大会を開きたいという気運が盛りあがったことである。

信徒宣教者として 鷹嘴 信子さん ボリビア（南米）へ

去る8月31日(日)、盛岡・四ツ家教会でイメルダ鷹嘴信子さんの、派遣式が行なわれた。「鷹嘴信子さん、あなたはボリビアへ向かいなさい。神の国を広めるために、あなたは必要とされています。この四ツ家教会から派遣します。あなたの上に神の祝福と聖霊の力が豊かに与えられますように」この派遣の言葉と共に、四ツ家教会の主任司祭ヨセフ師とバウマン師、そして信徒代表の米内晴男氏から按手を受けた。そして聖書とロザリオが贈られた。それは福音を伝える人、祈る人になるようにとの願いが込められたものである。

「誰かのために少しでも役に立ちたい。あの恵まれない子供たちのために手をかしてあげたい」との思いを持ち、鷹嘴信子さんは、ボリビアのサンタクルスへ9月3日、出発した。彼女はサンタクルスの大司教区で、信徒グループのボランティア活動の一人として、2年間働くことになっている。

尚、鷹嘴信子さんの兄は大湊教会の鷹嘴神父、姉は聖ウルスラ会のSr鷹嘴。

YBUに協力するため カナダから3人のシスター来仙

カナダから3人のシスター、Srリタ・ルイズ、Srモーリン・ダン、Srリタ・ブラッケンがYBUの英語教室に協力するために来仙。

彼女たちはイエズス・マリアの御名の修道会の3人で、1年間の契約。同修道会は戦前鹿児島で活動をしており、現在カナダとアメリカに3千人の会員がいる。

尚、YBUの英語教室は元寺小路教会の元YBUの建物でも開かれている。

(祝) 初誓願式

—オタワ愛徳修道女会—

10月10日、竹中史江さん（東京・イグナチオ教会出身）と山下美枝子さん（福岡・黒崎教会出身）の二人が、オタワ愛徳修道女会本部修道院（仙台）で初誓願を立てた。

佐藤千敬司教他12人の司祭による共同司式で誓願式が行われ、二人の両親他およそ百人程が出席して、よろこびを共にした。

福岡から来られたバイヨ師（黒崎教会主任）はあいさつの中で「今ここに初誓願を迎えることができたのは、困難の中でも、修道生活への志を持ち続けたからである」と語った。

二人は誓願準備の黙想の中で、人々の祈りを強く感じ、今後も御父の愛を生き、それを人々に伝えるためにも祈りとはげましをお願いしたい、と語った。

「聖書深読会」のお知らせ

日　時—12月13日(土) 19時～21時
　　　　12月14日(日) 9時～17時頃
場　所—仙台市角五郎2—2—14 聖ドミニコ学院
指　導—奥村一郎神父様（カルメル会）
会　費—二、五〇〇円（昼食を含む）宿泊する方は四、〇〇〇円
持参品—聖書、メモ、筆記用具
申込み—12月10日まで tel 022—225—1055
　又はハガキで（宿泊の有無を明確に）
責任者—仙台市角五郎2—2—14
　聖ドミニコ修道院　Sr大沼

教区大会

「青年部会」を終えて

危ぶまれていた青年部会が青年達の熱意と実行力によって、今大会の実りの中で一番具体的な成果をあげた。今後が期待される。

　去る9月14日から15日にかけ、仙台教区50周年を記念して開かれた教区大会の中で、青年部会が設けられ、仙台教区の各教会から集まった青年達が二日間にわたって行動を共にしました。

　この青年部会を設けるにあたっては、テーマを教区大会のメインテーマである「明日の教会をめざして—教会の未来は家庭にかかっている—」を基に、「生活の中の信仰」（同じ信仰を持つ青年が互いに影響し合い、生活の中で信仰を実践していきたい」とし、今年6月に実行委員会を発足させて準備を進めてきました。

　当日は受付を済ませた後、まずは全体のプログラムに参加。開会式、みことばの祭儀と続き、大阪堺教会のコレーン神父による講演。質疑応答の後、青年部会に分かれました。まず白百合幼稚園体育館にて、導入のための講話である村首神父の話を聞き、教室に移動して各グループ（七、八人）で、事前に通達しておいた話し合いのための問いを基に、意見を分かち合いました。次に視聴覚室に移り、全体での話し合いが持たれ、先にグループによって話し合われた意見の交換や、主に問題になった点などを発表し合いました。また、今後このような集いが継続して定期的に持たれるようにとの要請に応えて、各県から代表が選出されました。そして教皇大使カルー大司教の訓示で全体会を閉会しました。

　その後、会場を光ケ丘研修所に移して行われた青年懇親会では、「おらが教会」と題しての各教会の紹介や、多彩な芸も飛び出して会場を大いに沸かせました。光ケ丘研修所ホールに集まった百名以上の青年の拍手が窓をゆるがし、その力強さが印象的でした。

　翌日は全体会のプログラムに参加。ミサ後の閉会式をもって解散となりました。

　終わってみて、準備委員の一人としては、反省・後悔が多数残りましたが、よい経験をさせていただいたと深く感謝しております。またこの部会を通して互いに出会い、分かち合えたことによって、たとえ青少年が少ない地域でも、知り合えた友達が支えとなり励みとなるよう、神に祈りたいと思います。

（佐藤　実貴）

　今を生きる青年達は、どんな考えを持っているのだろうと、興味津々で参加した。活発なディスカッションや懇親会では、若いとひそかに自負していた私も圧倒されてしまった。

　ともあれ彼らの持っている可能性、「若さ」というエネルギーを、神のため、人々のために使ってほしいと願ってやまない。

（女子パウロ会　植山　由紀）

　青年部会の話し合いでは、職場や毎日の生活に関しての中味の濃い意見がかわされ、とても勉強になりました。そして場所を光ケ丘研修所に移しての懇親会では、各教会の人達によるおもしろい話や芸などに笑わせてもらい、東北各地にはまだまだうわ手のやつがいるな、と深く痛感させられた一日でした。

（佐藤　雄自）

　グループでの話し合いの後の全体会では、各々のグループでの話し合いの結果や、個々人の体験談を聞くことができ、素晴らしく思いました。この中で洗礼の話がありましたが、幼児洗礼の方々がご家族と一緒に教会に来ている姿を、私は本当にうらやましく思っています。

　カルー大司教の訓示には感銘しました。今回の青年部会を通して私の信仰が強まるように願いたいと思います。（佐藤　陽子）

（元寺小路教会「わかば」より転載）

スカウトは いま！

仙台ＹＢＵ

スカウト活動の価値は、今日の青少年の健全育成のために最もよい活動の一つだと思います。スカウト活動の創始者ベーデン・パウエルは世界各国のスカウトを訪問したとき、「スカウトの精神を一番よく守っているのはカトリック・スカウトである」と言いました。それは、カトリック・スカウトがその約束と掟をよく守り、毎日の善行を実行したからです。

私がいたカナダ・ケベックのカトリックスカウトでは、どこでも隊つきの司祭がおり、隊の霊的指導者・案内者となっていました。また、私たちはスカウト活動の土台であるパトロール隊（班集会）という組織を持っていました。隊員は全体の活動の他に、班集会をもち、毎日でも自由にそこに行き、集会の準備をしたり、雑事や大工の仕事をしたり、また救急法、手旗、電気技術や宗教などのバッジをもらうために練習をしていました。そしてスカウト活動の中心は夏休みに2・3週間続くキャンプでした。他のすべての活動はこのキャンプの準備のためにあるようなものでした。このキャンプにくることのできない子供はスカウトに入ることができませんでした。とにかく、私が入っていたスカウトでは、40人のうち25人が司祭になり、うち6人が宣教師、2人が司教にまでなりました。毎年司祭の指導で3日間の黙想会がありました。あるフランシスコ会の司祭が、「もしスカウトがその掟と約束を完全に守るならフランシスコ会の一番よい人よりも立派な聖人になれる」と言ったのはこのときです。

さて日本では違った状況下にあります。いくつかの理由のために望ましいスカウト活動をすることができません。その一番大きな問題は学校のこと、子供たちは学校の勉強やクラブ活動のために毎週スカウト活動に出席することができません。同じ理由で子供たちは自分たちだけの家を持つことができません。パトロール隊（班集会）ができないと、ほんとうのスカウト精神を学ぶことが難しいのです。夏休みでも色々な仕事があって、長いキャンプをすることができません。せいぜい3〜4日くらい。とは言っても現状の中でできるだけのことをしなければなりません。基本的に言うなら、「スカウトの約束と掟を守ること、宗教心を育むこと、奉仕する心。つまり愛の実行を喜んですること。それから、できる限り班集会を実行すること。そして父母との話し合い協力を密接にすること」。

私としては司祭、そして宣教師としての務めがあります。いつかのとき、私はスカウトたちと深い森の中を歩いていました。すでに3時間も歩き、みな疲れ、のどが渇いていました。そのとき、私たちはきれいな水のある小川に出合いました。すぐに水を飲むこともできましたが、隊長は次のように言いました。「いま、アフリカでは水も十分に飲めない宣教師がいます。私たちはその人のためにこの水を捧げようではないか」と。子供たちは喜んで従いました。

仙台YBUでは、12年前からスカウト活動をしております。色々困難な問題もあり、私は百パーセント満足していませんが、リーダー、父母の方々には百パーセント満足しています。ボーイスカウトの方は3年前から始めました。まだできたばかりですが、すこしずつ軌道に乗りつつあります。

最後に、今までYBUスカウト活動のために献身的に奉仕してくださったリーダー、父母の皆さんに心からお礼と感謝を申し上げます。そしてこの運動全体を神のみ手にゆだねます。

（ローラン・ジョリコール）

【編集後記】

教区大会を終え、一息ついていることと思います。特に企画・実行に関わった企画委員、実行委員の皆さま、ご苦労様でした。

8月、9月の2か月間教区報が出せず、いつものことながら読者の皆さまにご心配をおかけしております。

本号は教区大会を中心に紙面作りをしました。第3面の青年部会の記事は元寺小路教会の青年会報「わかば」から全面的に転載させていただきました。青年部会の流れ、参加者の感想が伝わります。

「明日の教会をめざす」仙台教区にとって青年達のこのような動きは大いに歓迎すべきことであり、彼らへの精神的・経済的協力がますます重要である。

（首）